

これからの「テスト」の話をしよう

～ ソフトウェアテスト白熱教室 in JaSST'11 Tokyo ～

JaSST'11 Tokyo クロージングパネル

パネルリーダー：西 康晴
パネリスト：Lee Copeland
細谷 泰夫
湯本 剛

【モデレータ】

西 康晴

NPO法人ソフトウェアテスト技術振興協会 (ASTER) 理事長、ISO/IEC JTC1/SC7/WG26 (ソフトウェアテスト) 国内委員会主査、日本科学技術連盟ソフトウェア品質委員会 (SQiP) 副委員長などを務める。電気通信大学にてソフトウェアのテストや品質などについて研究や教育、コンサルティングを行う傍ら、ソフトウェアテストのビジョナリーとして「現場に笑顔を」をキーワードに飛び回っている。

【パネリスト】

リー・コーブランド

ソフトウェア開発やテスト、プロセス改善に関してコンサルティング、講演、著述など35年の経験を持ち、数々の企業や非営利法人の技術的・経営的要職に就いている。世界で最も著名なソフトウェアテストの商業カンファレンスであるSTAR Conferenceのプログラム委員長も務め、「はじめて学ぶソフトウェアのテスト技法 (日経BP社)」も執筆している。

細谷 泰夫

三菱電機において通信システムのソフトウェア開発業務に従事する一方、コミュニティ活動では、XPJUG関西においてアジャイルプロセスを広める活動を行っている。組込み開発において特に品質保証が重要視されることもあり、アジャイルプロセスにおける品質保証やテストに関心を持っている。

湯本 剛

ソフトハウスにて、パッケージソフト、プリンタドライバ、C/Sシステム、Webシステムなどのソフトウェアテスト業務に約10年ほど携わった後、テストプロセス改善のコンサルティング、教育に約7年ほど従事する。現在はHP Softwareにてテストツール導入のコンサルタントとして活動中。ASTER理事、日本科学技術連盟SQiPステアリング委員、ISO/IEC JTC1 SC7 WG26エキスパート、JSTQB技術委員。

【質問①】

テストを省くと
リリースが間に合う
状況があったとしたら、
そのテストを
省いてもよいのだろうか？

【質問②】

正社員テストエンジニアに
高い教育投資をし、
派遣のテストオペレータに
単純作業をさせるのは
公正なことだろうか？

導入

- 「やあみなさん、私の教室へようこそ。もうみんなわかるよね、これが何のバグか？」
- JaSST11Tokyo の二日間を締めくくるクロージングパネル「ソフトウェアテスト白熱教室 これからのテストの話しよう」はこうして始まった。タイトルから察する通り、アメリカの哲学者マイケル・サンデル教授の「ハーバード白熱教室」こと、例題や実際の実例を出しつつ、学生に難題を投げかけ議論を引き出す形式に、モデレータに西康晴氏、パネリストにリー・コーブランド氏、細谷泰夫氏、湯本剛氏を迎えて挑んだ。
- 通常、パネルディスカッションという企画はモデレータの出す命題について、パネリストがそれぞれの見解を述べ、時にモデレータがそれを発展、昇華させながら議論を有意義なものに導く、という形式をとるものが多いが、JaSST11Tokyo のそれはインスパイアされた「ハーバード白熱教室」に倣い、クロージングパネルに参加した六百人を優に超える来場者へ命題を直接投げかけ、来場者は挙手をもってその問いかけにその場で答えるという、これまでに類をみない形式がとられた。参加者自身が直接セッションに参加するのである。

命題と第1問

- モデレータの西氏より会場に投げかけられた命題は2つ。
- Q1. テストを省くとリリースが間に合う状況があったとしたら、そのテストを省いてもよいのだろうか？
- Q2. 正社員テストエンジニアに高い教育投資をし、派遣のテストオペレータに単純作業をさせるのは公正なことだろうか？
- 前者の設問では、想定したテストを全うしたいと考える現場の担当者、「省いてよい」と指示する側のマネージャ、バグの収束をみるべきであると述べる来場者らによる議論が徐々に熱を帯びる中、細谷氏は反復型プロジェクトにおける障害分類と設計分析によるアプローチを展開。コーブランド氏からは「リスクベースドテスト」を用いたテスト終了判定のアプローチが投げかけられる。これに対し湯本氏は「リスクベースドテストで重要なのは、その問題が市場で発生したときに誰がどれだけ困るのかちゃんと考えているかどうか」と述べた。

第2問～まとめ

- 後半は現在の国内テスト市場におけるとてもナイーブな問題を扱う。当然、期間を定めない雇用契約である正社員に投資すべきである、否、どういう契約であれ現場の人間にまずは機会を与え、それを横展開すべきである。では、横展開は期待どおり機能するのか？いやいや雇用形態云々ではなく、やる気のある者に投資すべきである、等異論反論の噴出する中「配管に興味の無い配管工、医療に関心の無い医者を雇いたいと思うか？」と述べたコーブランド氏のコメントが印象深い。
- 本家、「ハーバード白熱教室」にまったく負けず劣らず白熱したクロージングパネルは予定された時間を少々オーバーし、冷めやらぬ会場のなか、各パネリストはこのように締める。
- 「テストはIEEE610に定義のある「エンジニアリング」である。体系的、定量的に頭を使って用いる必要がある」と湯本氏。
- 「開発とテストの人間が共に作業すると得られるものが非常に多い。お互いに学び合う事でソフトウェアをより良くしていくことができる」と細谷氏。
- 「会場のみなさんのおかげで素晴らしいパネルになった。ありがとう」とコーブランド氏。

最後に

- そして最後に
- 「みんなで集まって議論をすることで色々な知恵が出て、テストをより愛することができる。テストに対するモノの考え方が変わる。我々自身の力でテストを進化させることができる。是非またこういう機会があれば積極的に議論に参加してほしい」
- モデレータの西氏が締めくくり、パネリスト、発言者、来場者全員がお互いを講え合う拍手を以て、このクロージングパネルは幕を閉じた。冒頭で述べたとおり、これまでに類をみない形式の挑戦的なセッションは、散会後の興奮した来場者の面持ちやウェアでの感想を見る限り、JaSSTの歴史に残る大成功を収めたと言えるのではないだろうか。